

おわりに

私は、合衆国コロラド州立大学大学院の修士課程 2 年生だった 1975 年秋に受けた「放射線生物学」で、可をとった。試験は獣医学科の担当教授と 1 対 1 の質問形式で、1 問目はメンデル遺伝学についてだった(2 問目は放射線遺伝学)。30 分ほどの試験の後で教授から頂いた評価は、「2 問目はよくできたが、メンデル遺伝学はダメです」だった。メンデルの遺伝法則の理解が不十分だったのである。サトウダイコンに導入した近縁野生種由来の染色体がもつセンチウ(ネマトーダ)抵抗性遺伝子を研究テーマとしていた私は面目なく、教授の言葉に俯く他なかった。

それから 40 年以上も経った今、「メンデルの仕事と生涯」を書こうと思った動機のひとつはこれだったのかも知れない。その後、教職についた私は、「遺伝学」と「細胞遺伝学」をそれぞれ 1 回生と 3 回生の学生諸君に講義してきた。その間、2003 年には中学の生物学教科書からメンデル遺伝学が消えた。今、高校生物学の教科書から「メンデル遺伝学」が消え、再び中学の教科書に戻ろうとしていると嘆く声が聞こえてくる。メンデル遺伝学が日本の教科書から消える日が来るとは思えないが、少なくともその取り扱いには変化が見られる。多くの教科書で、メンデル遺伝学は DNA の説明の後に、細胞分裂との関連で書かれている。遺伝子 DNA の構造、複製様式と機能を理解したうえで、子孫への形質伝達の仕組みであるメンデルの遺伝法則を教える方が効率がよいし、学生諸君にも理解しやすい。私も講義ではそのやり方を採用している。反面、このやり方は歴史を無視したきらいがある。私達の知識は、そのように積み上げられてきたのではないからである。どんな知識もそれが生まれ育った時代という文脈に置いて初めて、生き生きとして血の通った意味を持つ。科学の歴史とそれを生み出した科学者の伝記が面白いのは、時代を超えて今を生きる私達の共感を呼ぶからだろう。本稿を読まれた方が一人でも多くメンデルを身近に感じて頂ければ、私は嬉しく思う。私にとっては、執筆に費やした時間は充実した楽しいひとときだった。

最後に、草稿を読んで意見や感想をくださった方々に感謝を申し上げます。特に、励まして頂き、誤りを指摘して頂いた常脇恒一郎先生、金田忠吉先生、

上島脩志先生、安田武司先生、向井文雄先生、竹田真木生先生、土佐幸雄先生、中屋敷均先生、杉本幸裕先生、岡田清孝先生、猪谷富雄先生に感謝致します。本稿の WEB 版を作成してくれた娘の加奈子と夫のデビッド・ピケット、パソコンに向かう私をいつも力づけてくれた妻の修代に特別の感謝を捧げます。